昭和42年3月

秋田県文化財調査報告書第12集

金沢柵跡発堀調査概報

秋田県教育委員会

横手市教育委員会

序

横手市金沢所在の金沢柵（現在の金沢公園）は、古くから史上で名高い後三年の役（１０８７年）の戦場とし顕彰された遺跡で、県内でも重要な遺跡の一つでありまして、文化財保護委員会で注視しているところであります。

県教育委員会では、横手市教育委員会、金沢柵顕彰会関係者の強い要請により、共催で第一次予備調査を昭和３９年８月に、第二次発掘調査を昭和４０年７月、第三次発掘調査を昭和４１年７月、それぞれ実施した。

発掘調査の目的は、後三年の役時代の遺構を発見することで、通称本丸、北の丸、西の丸を中心に発掘を行なつたところ建物跡や、出土品において平安期のものがみつかり、柵跡遺跡の時代的性格が明らかになつてきた。

この三回にわたる調査では、最終的に金沢柵跡と断定できるきめ手は把あくできなかつたが、柵跡としての推定が成りたつようになつたことは、大きな収穫であつたと云えよう。この報告書はしたがつて中間的なものであり、今後の継続調査を期待しなければならないが、一応のまとめとして研究者の資料となれば幸であります。

また、発掘を担当された岩手大学教授板橋源氏、秋田県文化財専門委員　奈良修介氏、岩手大学技官佐々木博康氏をはじめ関係者各位に紙上をかりて深く感謝の意を表するものであります。

昭和４２年３月

秋田県教育庁社会教育課長　　石　川　哲　三

目　　次

序
一　発掘調査にいたるまでの経過 …… 1
1.　地　形　概　観 …… 1
2.　研究史の概要 …… 1
3.　地　　積 …… 1
二　発掘調査の経過概要 …… 5
1.　第１次予備調査 …… 5
2.　第２次発掘調査 …… 5
3.　第３次発掘調査 …… 6
三　調査の成果 …… 7
1.　本丸西南隅地区 …… 7
2.　北の丸地区 …… 10
3.　西の丸地区 …… 10
A　地　　区 …… 11
B　地　　区 …… 11
C　地　　区 …… 11
塹　　跡 …… 11
4.　出土遺物 …… 12
四　考　　察 …… 15
あ　と　が　き

図　版　目　次

第　1図　金沢柵跡近傍地形図（５万分の１）…… 23
第　2図　金沢柵跡近傍地形図（３千分の１）…… 24
第　3図　金沢柵跡航空写真Ａ …… 25
第　4図　同　上　　Ｂ …… 25
第　5図　本丸西南隅地区実測図 …… 26
第　6図　北の丸地区実測図 …… 26
第　7図　北の丸地区発掘写真 …… 27
第　8図　西の丸地区実測図 …… 28
第　9図　西の丸地区現状写真 …… 29
第１０図　西の丸Ａ、Ｂ地区実測図 …… 30
第１１図　西の丸Ａ地区発掘写真 …… 31
第１２図　西の丸Ｂ地区発掘写真 …… 31
第１３図　西の丸Ｃ地区実測図 …… 32
第１４図　西の丸塹跡実測図 …… 33

金沢柵跡発掘調査概報

板橋　源
奈良修介
佐々木博康

発掘調査にいたるまでの経過

1　地形概観

後三年の役の最後の決戦場として、史上に著名な金沢柵は秋田県横手市金沢町にある一丘陵であると、かなり古くから伝えられていて、異説は今までのところまつたくない。

この丘陵は比高約９１メートルもあり、[註1]かなり急峻な地形である。この頂上に立てば、いわゆる平鹿、仙北二郡の平野を一望することができる形勝の地でもある。丘陵の東麓から北麓にわたつて厨川がめぐり、急涯をなしている。西方と南方には、はるかに西沼、蛭藻（ひるも）沼・御所野沼・天狗沼など大小多数の沼沢をひかえ、やはり急涯をなして低湿沼沢地にのぞんでいる。
（第1.2.3.4.図）。西と南には、はるか西沼蛭藻（ひるも）沼。御所野沼、天狗沼など大小多数の沼沢をひかえ、やはり急涯をなして臨んでいる。

2　研究史の概要

詳細な旅行観察記録をのこした博識な菅江真澄の「月之出羽路」[註2]近藤重記の「出羽国風土略記」[註3]というような旧藩時代の地方文献のみならず、水戸の「大日本史」、[註4]村岡良弼の「大日本地理志料」[註5]などという中央における文献にも、この地が金沢柵であると記述されていて、今までのところ他に金沢柵跡擬定地としては異説はないのである。[註6]明治以降、この地方の人士によつても研究がなされている。たとえば、戎谷（えびすや）南山、伊藤耕餘翁によつて深められ、それらの成果は深沢多市によつて「秋田県史蹟調査報告第一輯、金沢柵趾と県社八幡神社」（昭和７年１２月発行）に集大成されるにいたつた。戎谷南山[註7]と伊藤耕餘翁[註8]の功績は没することはできないのである。両氏の顕彰碑がいま本丸跡に建つている。

深沢多市の報告書が公刊されると、この報告書は大類伸・鳥羽正雄両氏の「日本城郭史」（１７０～２頁。昭和１１年）や、富山房の「国史辞典」（第２巻６１４頁。昭和１５年。上田三平執筆）にも引用されて今日にいたつている。[註9]

3　地積

以上のほかに享保八年（１７２３）４月の奥書のある白雉と号する人の略地図、寛政３年（１７９１）２月４日の奥書ある信躬先生[註10]と称された人の見取図などが金沢町田町の本間四郎家に所蔵されていて、おおよその柵域が想定されてきていたのである。それを現行の地積で表示すると、

大字	字	地番	地目	実測面積
金沢中野	岩辺操	1. 3. 4	山林	反 9. 120
〃	〃	2.	〃	2. 905
金沢	安本館	5. 6. 10 11	〃	31. 525
〃	〃	9ノ1	〃	23. 715
〃	〃	4	社地	8. 116
〃	〃	1. 2. 3.	畑	2. 814
〃	〃	7ノ2、9ノ2	山林	810
〃	〃	7ノ1	〃	17. 500
金沢中野	金洗沢	1. 2	〃	32. 905
〃	〃	4. 10	〃	12. 905
〃	〃	3. 5. 6. 7. 8.	〃	78. 310
〃	八幡平	1. 2.	〃	26. 215
〃	根小屋	169. 175	〃	3. 310
〃 〃	沢小路	1. 2. 3. 4.	〃	33. 310
〃	権五郎塚	2ノ1	〃	12. 525
〃 〃	〃	2ノ2. 5ノ1 5ノ2	公園	15. 810
〃	〃	5ノ3	山林	1. 905
〃 〃	小井戸沢	1. 2. 3. 4. 5. 6.	〃	45. 000
〃 〃	岩瀬沢 〃	3. 4. 5.	〃 溜池	131. 620 810
	以上柵	跡計		490. 910

（「秋田県史蹟調査報告第一輯」１１頁）のごとく広大な地域にわたつている。

但し、前掲表の地積には祇園寺地区が含まれていない。現存地形から考えると、この丘陵の東北から北麓をめぐつている厨川にかこみこまれる地域一帯を遺跡とみなすのが至当なようであるし、そうである。

とすれば祇園寺地区も当然このうちに包括されることになる。

県調査報告第一輯所収の「鳥瞰図」は「約１５００分の１」で大正１４年調査のものであるが、これには「史蹟地区大字金沢中野字権五郎塚二番ノ一外六一筆、実測面積六拾町参反五畝壱歩の実測図に依る」と註記してある。」

昭和１４年４月から開始し同１７年１２月に完成した村田泰助氏の「仙北郡金沢町大字中野字権五郎塚弐番ノ壱外六拾壱筆史蹟地区実測図」（三千分の一、渡部耕三氏所有）にも「実測面積六拾町参反五畝壱歩」とあり、大正１４年の実測調査と昭和１７年１２月完成の実測の結果は両者一致している。それで、遺跡の地積は前掲表の４９町余とみなすよりも６０町余とみなす方が穏当のように思う。

ただし、遺跡の地積問題に関して気にかかることが一つある。

それは金沢柵跡といわれている丘陵附近の水田から柱脚が発見されており、この柱脚の仕上げ手法は払田柵、城輪柵、胆沢城跡、徳丹城跡などで発掘された柵木ときわめて似ているのであるが、柱脚を出土する遺跡はいかなる性格のものであるのか、それは金沢柵と関係があるのか無いのか、そういったことが全く不明であるからである。

参考までに、いままでに知られている柱脚について列記しておく。

(1)　金沢町字中谷地一番地水田出土柱脚

これが発見された経緯は「林沢歳時記」[註11]にかなり詳細にのべられてある。この書は非売品であり発行部数も僅少であつたらしく、なかなか閲覧できないので、ここに引用してみよう。

「昭和５年冬１１月、山田斎兵衛氏の小作人が、田に誘水路を造るため、４５人で工事に従事、従来とかく邪魔で仕方なかつた埋没角材の除去に努力した。始めは斧で削りどうやら動きそうになつたので、更に２、３の助力を得て全剛力で抜きあげたのが今回の柵木であつた。それを畷に引上げて乾いたら薪にしやうとしてる由を聞き込んだ戎谷翁が、墾望して点検すると、高さ二尺五寸の角材、四方幅一尺九寸、上部一方に刳跡がある。（中略）底部も、四面も平安時代の小型斧跡が鋭利に残つてある。（中略）この柵木と共に柵木の傍から同時に発掘されたのは、方六寸角材の断片である。これは柵木の支柱であろうという、本柵木の底辺には青砂利が、グルリと繞らされ、柵木を緊縛したらしい木天蓼（またたび）か、葡萄蔓らしい蔓材が絡らみついてあつたとの事である。」（６５１頁）

この柱脚は、薄葉篤蔵氏（横手市立横手北小学校長）の談話によれば、須恵器とともに出土したというし、大正５～６年ごろにも同所付近で経１尺２～３寸、長さ１丈２尺ほどの円柱が出土したことがあつたという。

昭和５年出土の柱脚は現在八幡神社に保管されてあるが、永いうちに割れたり目途穴が欠損したりしている。前記の記事によつて形状や寸法がわかるのは幸いである。「刳跡」とは目途穴に相違ない。

出土地は金沢柵跡の北麓を流れている厨川を北に越えさらに中の目川を北に越えた約２５００メートル北方の水田である。

(2) 金沢中野字上矢来沢３８１番水田出土柱脚

これは現在横手市金沢支所に保管してある。その発掘経緯は福田久四郎氏によつて「金沢柵址、柵木発掘地点説明図」[註12]として忠実に記録されてある。手書した未刊であるので、ここに引用しておく。

「柵木発掘状況

昭和３５年１１月末頃、横手市金沢中野字上矢来沢４２番農竹原金三郎氏が、上矢来沢３８１番の自己水田を暗渠排水工事中、一反歩田の略中央に当つて、地下約１５.６センチの処で、直径約６０センチ程の一本の柵木につき当り、そのままでは引き上げ困難の為、斧で分割して漸く引き上げたといつている。（長男喜一と二人で）。

私（福田久四郎）がこれを知つたのは翌年６月２２日で、早速竹原氏宅に行つて見ると、柵木は自宅に運ばれて乾燥次第風呂の薪にしたといつて、約４分の１位しか残つていなかつた。これを貰い受けて保存すると共に、同年１１月４日発掘地点を中心に検土機で周辺をボーリングして見たが何の手掛りも得られなかつた。

昭和３９年５月５日、横手市社会教育課が中心となつて、後三年史蹟顕彰会、横手市郷土史編纂委員会、横手高校考古班等の協力を得て、約３０人で同地の一反歩田全面を一メートル間隔にボーリングして見たが、この日も何等の手答えも得られなかつた。

現在残つているものは写真のように略三本となつているが、内二本には底部から約１６センチの高さの所に縦横ほぼ１０センチ前後の穴がある。柵木の高さは約７０センチ、底部は小斧の切り址がはつきり残つている。年輪から見て、約２百年に近い杉材で、もとは直径６０センチ位のものだつたと思う。」

薄葉篤蔵氏の話によれば、このとき須恵器破片が伴出したという。この出土地は金沢柵跡本丸から直線距離にして約１６００メートル南西の水田であつて、暗渠排水をしなければならないところをみると低湿な所である。

(3) 金沢町柳原出土柱脚

この柱は現在どこに保管されてあるのか、それともまた消失したのか、その行衛は未詳であるが福田久四郎氏が昭和３１年１０月１０日現在で作製した「旧仙北郡金沢町郷土史地図」[註13]に記載されてある。

出土地は金沢柵跡本丸から北西１８００メートルの水田である。

(4) 下境字斎藤小屋九ノ四出土柱脚

佐川良視氏の談話によれば昭和３９年の３月か４月に日高謙治郎氏の水田から出土したもので、

長さ7尺1寸、周囲6尺3寸の丸材で、底部から1尺のところに目途穴がある。材質は杉。これと同時に栗の板材も出土し、これは長さ5尺4寸5分、厚さ6分、幅1尺4寸。

出土地点は金沢柵跡本丸から西南約6キロの水田である。

以上のほか出川の南岸より100メートルか150メートルの所でも杉材らしいものが出土し、土地では「ねぎ」（寝木カ）といつているという。言葉からみると横になつているものらしい。また薄葉篤蔵氏（横手市立横手北小学校長）の談話によれば、仙南村寺田、仙南村上野際（かみのぎわ）の狐森、旧朝倉村上台（うわだい）（現横手市内）などからも柵木が出土しているという。

前掲の(1)、(2)、(3)、(4)、のすべてについて、まだ発掘調査をしていないので、このような柱脚をもつ遺跡は、はたして金沢柵跡と関連があるのか、どうか未詳であるので、金沢柵跡の地積についても確言いたしかねるのである。さきに60町歩余といつたのは、いまのところ一つの想定にすぎないのである。

二　発掘調査の経過概要

1　第一次予備調査

前述してきたことは、土地の伝承とか現在地形や古絵図、古記録などから考定されたものであつて明確な遺構が発見されたというような積極的な明証がないまま今日にいたつているのである。

そこで、昭和39年8月5.　6.　7.　の3日間にわたり横手市教育委員会の企画により、予備調査として本丸と称されている地区を奈良修介、豊島昂が発掘したところ、多数の柱穴が発見され、そのうちには、かなり大きな柱穴の密集している場所もあり重要な遺跡と思われるにいたつた。

2　第二次発掘調査

前記予備調査の成果により、翌年左記要項による調査が実施された。

1.　発掘調査の主体

秋田県教育委員会

横手市教育委員会

後三年史跡顕彰会

2.　期　　日

昭和40年7月22日より8月2日までの12日間

3. 発掘場所

本丸跡	２０アール	計　３０アール
北ノ丸跡	１０アール	

4. 担当調査員

秋田県文化財専門委員	奈良修介
岩手大学教授	板橋源
秋田大学教授	半田市太郎
元金沢公民館長	福田久四郎
横手高校教諭	国安寛
鳳巣農林高校教諭	富樫泰時
敬愛高校教諭	鍋倉勝夫
横手工業高校教諭	栗谷秀雄
	福田幸三
	藤村貢
事務担当	
県教委文化係長	加賀谷辰雄
県教委社教主事	吉川欣一
同	佐々木清
市教委社教課長	小助川猛
市教委社教主事	松本史朗
同	伊藤正男
市役所金沢支所長	伊藤金之助

以上のほか県立横手高校、県立横手工業高校、市立鳳中学、県立秋田北高校、市立金沢中学、市立横手一中等の生徒諸君多数の援助をうけた。なお地元婦人会の奉仕をいただいた。ここに謝意を申しのべます。

成果については項をあらため一括してのべることとする。

3　第三次発掘調査

第二次発掘にひきつづき翌年また左記要項により第三次の調査が実施された。

1. 発掘調査の主体

第２次に同じ

2. 期　　日

昭和４１年７月２５日より８月３日までの１０日間

3. 発掘場所

本丸跡	２０アール	計　５０アール
西の丸跡	３０アール	

4. 担当調査員

秋田県文化財専門委員	奈良修介
岩手大学教授	板橋源
岩手大学文部技官	佐々木博康
横手高校教諭	国安寛
鳳巣農林高校教諭	富樫泰時
敬愛高校教諭	鍋倉勝夫
横手工業高校助手	藤村貢
羽後町軽井沢小学校教諭	永瀬福男
岩手町水堀中学校教諭	木村幸治
事務担当	
県教委社教主事	加賀谷辰雄
同	吉川欣一
市教委社教課長	小助川猛
市役所金沢支所長	伊藤金之助

以上のほか県立横手高校、県立横手工業高校、県立六郷高校および市立鳳中学校、横手一中、金沢中学校等の男女生徒多数の援助をうけた。なお地元婦人会の奉仕をいただいた。ここに謝意を表する。成果については項をあらため一括してのべることとする。

三　調査の成果

1　本丸西南隅地区（第５・６図）

「南山戎谷君寿蔵碑」に向つて右手の路をのぼれば本丸にいたる。本丸にのぼり切つたすぐ左手で第５図のごとき掘立式柱脚のホリカタが現地表下約３０センチで、軟質凝灰岩の岩盤に発見された。ホリカタの形状は次表のごとく大きいが、その配置は不整である。しかし約８尺２寸×約６尺３寸の

建物の４隅の柱跡である。

ホリカタ	形	状
整理番号	平面の大きさ	深さ
A　1	約3尺0　×　約3尺5	約　3尺5
A　2	〃2・5　×　〃2・5	〃　1・7
C　2	〃4・0　×　〃3・0	〃　2・7
C　3	〃3・5　×　〃2・5	〃　2・3

ＢとＣ１のホリカタは別個の建物跡の柱跡であろう。

頑丈な4本の掘立式柱脚をもつて支えられたこの遺構は櫓ではなかろうか。櫓といつても、いままでに知られている徳丹城跡の柵列線に沿つた櫓[註14]とは柱数が異なり、従つて構造も多少異つている。むしろ中世の文献[註15]にみえている井楼（せいろう）というものの構造に似ている。

井楼は敵情偵察のために必要なとき適宜の場所に短時間で建設し兵を登らせる建造物である。もともと巨材を井桁に高く組むので井楼というのであるそうだが、城楼という文字をあてる場合も「せいろう」とよんだらしい。谷川士清（１７０７－７６）の「倭訓栞」に「せいろう、兵家にいふは城楼と書り、櫓なりといへり」〔中編１２〕とみえている。「栖楼」とか「棲楼」の文字をあててもともに「せいろう」である（「能島家伝」）。

井楼には車井楼、櫓井楼、釣井楼など構造上いろいろ種類があつた。釣井楼は「巣車」の文字をあてる場合があつてもやはり「つりせいろう」とよんだらしい。寺島良安の「倭漢三才図会略」（通称「和漢三才図会」（正徳二年、１７１２年の自序あり）に

「巣車（つりせいろう（ママ））此云釣井楼、（中略）按、巣車即、釣井楼也、其制不一、有車井楼、櫓井楼等之異、皆令人登、窺敵陣之機也」とみえているからである。

さて、井楼は中世の文献にみえているとのべておいたが、そして管見のおよぶ限りにおいては、古代の文献にみあたらないのであるが、中国においては「史記」や「漢書」にすでに「井幹楼」というのがみえていて「井桁のように組上げた楼」[註16]と解釈されているので、そうであればわが国の井楼と中国の井幹楼とは、その構造上においてまことに近似しているので、あるいは井楼は井幹楼にその系譜がつながるのであるかも知れない。又は別に、ぎりぎりの極限的必至条件に遭遇することの多い戦闘経験から、わが国においても、独自に考案されたのであつたかも知れない。いずれにもせよ、文献の上では井楼は中世以降の文献にしかみえていないが、平安朝期にもありうるとみても差支えあるまい。

そこで、中世以降の文献ではあるが、それらにみえている井楼の築造法とか、その構造をみると「

セイロウヲアグルハ、先スソバカリに柱ヲふんばらせ、ツヨク立也。一重あぐるはサマ（板橋註、サマとは狭間。塀壁とか櫓には外景を望見したり、矢や弾丸をうち出すための小窓を設けてある。そのことであろう。）を下にて切て、面ノ方ヲ先、トク上ベキ也。一重の時も上へあげ、かさぬるように柱の心立をしてあぐるなり。又夜中にあぐるがよき也。敵へ近くあぐる時、如此。昼は敵見スカシ矢ヲ射、あげにくき也。面に矢ヲふせぐ用意をしてあぐる也。此時ノたてこしらへよう可在之」（「築城記」。新校群書類従第１８巻３６９頁）。「寄せ衆之内、大せいろう被上候ば、備前の武州殿、大坂天満八間屋の前川中に、一夜の内に五重のせいろう上げられ候。大坂町を見落（板橋註、見おろし）し候様に被成候事、其せいろうより内の塀の間は２４，５間程ならではなく候」（「長沢九郎兵衛聞書」改定史籍集覧第１６冊５３頁）などとあるように、戦機に応じて迅速に建設するものであつたらしい。

「永享記」の結城落城をのべてある条に「清方持朝千葉土岐等が陣の前には、十餘丈の井楼を二重三重に組上たり」（改定史籍集覧第十二冊７４４頁）とみえているが、井楼の高さは果して十余丈もあつたのであろうか。誇張のように思われる。

近世になつてからのことであるが軍学者山鹿素行は「井櫓の事。下にてことごとくこしらへ、後に押立る也。長き柱４本、ぬきをぬき、板をしき、ねだに用い、さて押立て、其後敵まへのかたの地きはより上まで板をうち、のぼり下りの敵より見えざるごとくいたすなり。　其の後しき板のやねを致すなり。　（中略）下にて楯の板をおしたつるを吉とするなり。　又、釣井楼は厚板にて一人入ほどの箱をさし、さま（板橋註、狭間）をあけ、上の方に綱をつけ、帆柱の如くなる木の先を帆柱のせみ口のごとく致、この箱の綱をとほし、城の壁ぎは又は築山より城内をみるなり」〔武教全書下６７）と記してある。以上は城外から城内を偵察する場合の井櫓一般のつくり方と釣井櫓の構造をのべたものである。釣井楼については「和漢三才図会」も、山鹿素行とほぼ同様な記述をしてあるが「箱」のことを「屋」といい「その屋、方４尺高５尺、生牛皮をもつてこれをつつみ、もつて矢石を禦ぎ、人をして屋中に蔵せしむ」（原漢文）と詳述してある。

徳川家康は三方ケ原合戦で井楼にのぼつているし（「東遷基業」三）、島原の乱でも井楼が攻城用につかわれている（「十時三弥介書上之写」改定史籍集覧第１６冊２７１頁）から、山鹿素行の記述は信ずべきであろう。

すでにのべておいたように、前掲の井楼は攻城の場合急造した例だけであるが、城内にも井桁に組んだ櫓はあつたであろう。）関東地方の中世城郭について造詣の深い小室栄一教授によれば城の櫓として九例をあげているが[註17]、すべて櫓のありそうな場所を想定してのことであるので、櫓そのものの大きさの寸法はのべておらない。であるから、金沢柵跡の通称本丸で発見された遺跡は稀有な例といわねばならない。

2　北の丸地区

本丸の北方に北の丸がある。北の丸の中央平担地とその北側杉林と東南部との三ヵ所の発掘を昭和４０年度におこない、建物一棟、推定門跡を検出した。

中央平担地で検出した建物跡は約４８度３０分東偏し、南北棟五間×東西三間で東面に縁か廂かと考えられる束柱穴があつた。北面と西面との一部に張出し部がある。柱間は母屋桁行１メートル７６センチ（６尺）等間、梁行２メートル１０センチ（７尺）等間で、そのうちの東端一間の間尺が１メートル７６センチ（６尺）、北面の張出し間尺が１メートル５２センチ（５尺）、西面の張出し間尺は２メートル１０センチ（７尺）で、柱穴は母屋、束柱とも方４０センチほどである。柱穴は母屋内にも存するが、南第一列の位置には認められなかつた。この建物跡に重複して他の建物遺構と考えられる柱穴があつた。

建物遺構や伴出遺物、西の丸地区の建物遺構などからみて金沢柵に関連するものであるとみなすことができる。

なお、建物跡の検出された平坦地北側において焼けた木炭屑、焼米がみられた。従つて建物は一度火災にかかり、それを整理したものと考えられる。

また北の丸の東南より、現在の標識石柱近くに門跡と思われる土壙を発見した。これは北の丸の建物跡より約８メートル５０センチ南方にある。

3　西の丸地区

本丸の西方にあたるこの地区は、軟質凝灰岩を削平して造成した平坦面が、中央の塹をはさんで西南、東北の二区に大別され、西南部は武者溜（むしやだまり）、東南部は安本館（やすもと）という名称でよばれている。武者溜（Ａ、Ｂ二カ所）、安本館（Ｃ）、塹の発掘は昭和４１年度におこなわれ、その結果建物三棟、柵１条、溝２条、塹１カ所を検出した。遺構の大部分は金沢柵に関連するものであることは遺構自体の性格や伴出遺物によつても明瞭である。遺構の主体をなすものは建物跡で、方位は多少異なるが、崖線方向と合致しており、その規模も類似している。明瞭なものだけでも三棟検出された。これらの建物は軟質凝灰岩の岩盤に掘立柱式の穴を穿つてである。１５センチ内外の表土を除去すると容易に柱穴を発見することができるのであるが、杉を植林しているため作業は疎外された。場所によつては柱穴が何重にも重複しているが、これは同一地域に時期を異にして造営されたためである。これは当地区のみならず金沢柵跡全域に共通していえることである。

なお、これらの建物跡に酷似（こくじ）した遺構がある。それは平泉町の判官館（高館）や中尊寺関山亭建設予定地を調査したさい、検出された掘立柱の建物をあげることができることを付記しておく。[註18]

以下、地区別に個々の遺構と、その配置について項を改めて記す。

A地区（第9.　10.　11.　12.図）

武者溜のほぼ中央部から一棟の建物跡が検出された。方位は約38度東偏しているが、南北棟五間×東西三間、四面に縁あるいは廂をめぐらしたと考えられる束柱穴がある。母屋の柱間は桁行梁行とも2メートル12センチ（7尺）等間、束柱の間は1メートル36センチ（4尺5寸）である。母屋の柱穴は方50センチ、深さ50センチほどで母屋内にも柱穴は存在していた。東柱穴は方30センチ、深さ30センチである。植林した杉のため一部未発掘になつたところもあるし、この建物跡に重複している他の建物遺構の柱穴もあつた。

また建物の西側束柱筋より3メートル20～30センチ西方のところに上幅20センチ、深さ10センチほどで南北に走る浅い溝とその内（東）側に小柱列がある。溝より1メートルほどで崖線に達するから、これは建物を守る簡単な柵と、その外側に付設された雨落溝であろう。

B地区（第9.　10.　11.　13.図）

A地区の建物から10メートルほど南にも建物が一棟検出された。これは33度30分東偏し、東西棟5間×南北三間、四面に縁あるいは廂と思われる束柱穴がある。柱間は母屋桁行2メートル12センチ（7尺）等間、梁行中央の間が2メートル58センチ（8尺5寸）、他は2メートル12センチ（7尺）である。束柱の間は1メートル36センチ（4尺5寸）である。母屋の柱穴は方40センチ、深さ30センチほどで、母屋内にも柱穴はあるが、方25センチ、深さ20センチと小さくなつている。束柱穴は方25センチ、深さ20センチである。この建物も植林した杉のため未発掘に終つた部分もある。また、この建物跡と重複して他の建物遺構の柱穴も発掘された。

C地区（第9.　10.　14.　15.図）

安本館のほぼ中央部よりA地区で検出された建物と同一規模の平面をもつた掘立柱式の建物跡が検出された。即ち南北棟5間×東西3間、4面縁か廂付の建物で、母屋の柱間は桁行、梁行ともに2メートル12センチ（7尺）等間、束柱（つかばしら）の間は1メートル36センチ（4尺5寸）である。母屋のうちにも柱穴がある。母屋の柱穴は方50～60センチ、深さ70センチほどであり、束柱穴は方30センチ、深さ30センチほどである。この建物も植林した杉のため未発掘に終つた部分もある。

またこの建物と重複して他の建物遺構の柱穴もあつた。

また建物の西側束柱筋より2メートル40センチ西方のところに上幅15センチ、深さ28センチほどで南北に走る浅い溝があつた。溝より1メートル20～30センチで崖線に達するのであるから、この溝もA地区で検出された溝と同様なものであると考えられる。

塹跡（第9.　10.　16）

武者溜と安本館とに区分している塹の発掘による断面形状はU字形をした鍋底状の隍で、水濠で

はない。上幅約９メートル、最深部で約３メートル４０センチ、造成時期を判断すべき伴出遺物は皆無。ただし、その形状は厨川柵（盛岡市厨川字権現坂の天昌寺西側）の隍の形状や、同じ安倍氏時代の柵跡と考定されている善知鳥（うとう）館（岩手県紫波郡紫波町）[註19]の濠跡の断面形状と酷似している。

4　出土遺物

本丸出土遺物

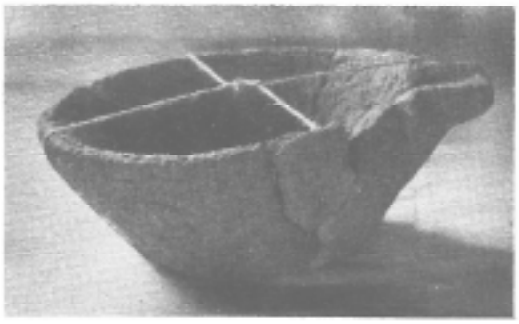
本丸南部の地表に近く第３トレンチの褐色土層中より中国古陶磁の青磁、及び黄瀬戸の細片、又地表より２０センチ位の褐色土中より、外壁に叩き目があり、内壁に渦文ない後期の須恵器小片、又須恵器の片口鉢の注口部も出土した。

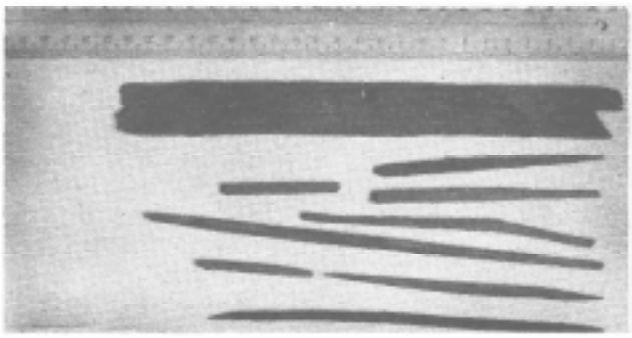
小鉄塊やくぎ、刀子残片も北部の第二層以下から現し、又南部の第３トレンチを中地表より約1.5メートルの所から石製片口鉢、（口径、長径３２.　2.　短径、２８.　２センチ、高さ１５センチ器厚さ４～１センチ）及び焼木、木炭木片、木箸等が多数が発見された。又同じトレンチ内（層位不明）より赤塗漆椀が発見された。この椀は糸底に４ツ目、鱗文の如き文が金泥にて画かれている。多分鎌倉以降のものと思われる。（口径１３.８センチ、高さ4.8センチ）

北の丸出土遺物

北の丸は建築址の柱穴のある平坦面には遺物は発見されず、北側縁辺の杉林中から焼木片や木炭の細片、焼米等が地表下１メートル程の黒褐色土から発見された。この遺物は以前に基盤層を覆うていた層の土壌中のものと思われる。

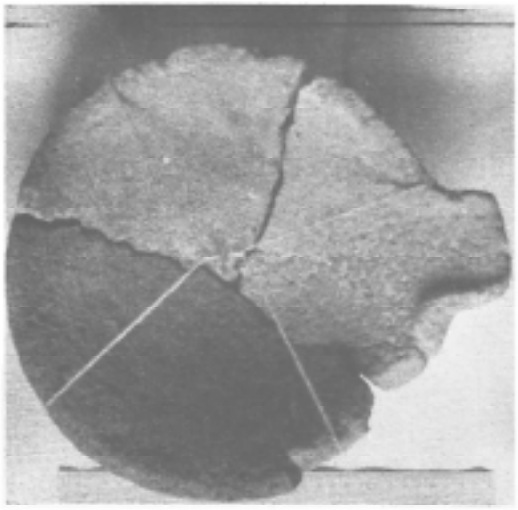
1

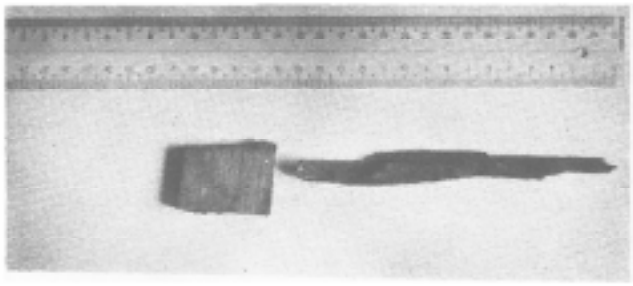




3

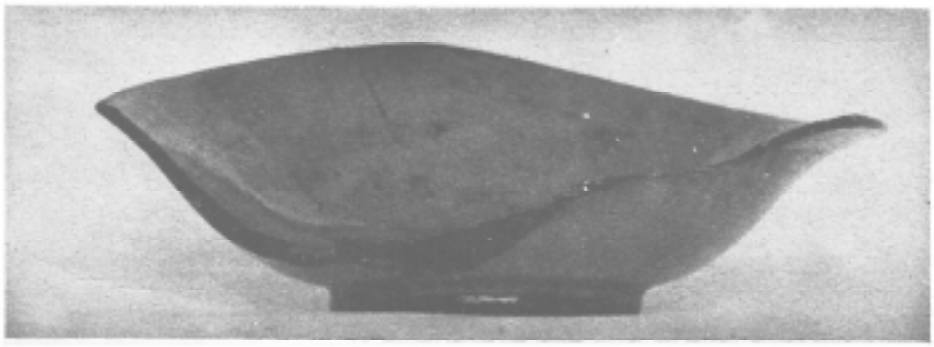
2





金沢楯本丸出土遺物

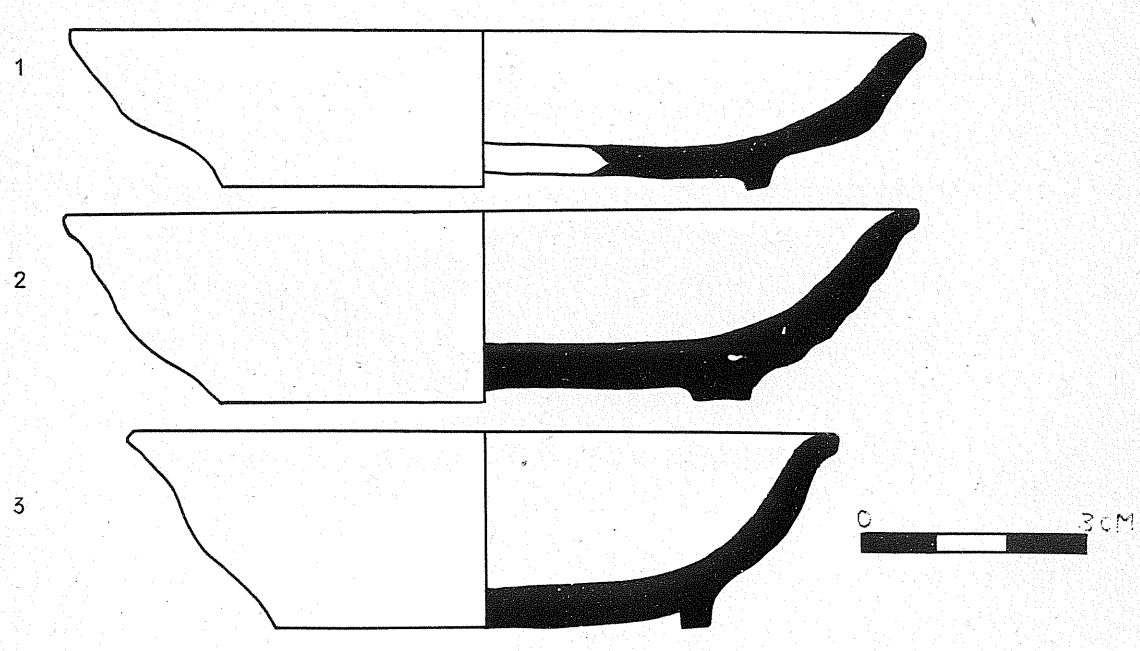
1，2　石製片口鉢　　3，木片，箸　　4，木片



金沢楯本丸出土朱漆椀

金沢柵本丸表土層出土

西丸C地区出土黄瀬戸



四　考　　察

いままでのところ、金沢柵の擬定地に関しては全く異説はなく、すべて横手市金沢町地内の前掲丘陵とされている。この丘陵は前述のごとく北高約９０メートルの高峻な地形である。文献史料にみえている金沢柵は、はたして、このような急涯高峻な立地条件にあつたのであろうか。

後三年の役を記してある文献ならば「秋田県史」の資料古代中世編にあげてあるように「源平盛衰記」、「保元物語」などを始めとして、「大日本史料」第三編之一（大正１５年６月）寛治元年１２月２６日条にみえている「百練抄」、「本朝世紀」、「中右記」、「吾妻鏡」、「古今著聞集」九武勇条、「今昔物語」２５などなど、かなりある。しかし、後３年の役そのものの経過をのべることを主眼としたもつともまとまつた文献史料ということになると、それは「奥州後三年記」であり、「奥州後三年記」の闕文部分を補つている「康富記」である。

したがつて金沢柵は、どんなような地形に立地していたのか、この点を推測できる文献も「奥州後三年記」を措いて他にはないのである。

ところが、ここで問題として危惧されることは、「奥州後三年記」は役終了後約２６０年も経過してからの著作であるということである。[註20]であるから記事をそのまま信じていいのであろうかという一抹の不安をいだかれるのも、当然なことである。しかし、それにもかかわらず、この点については既に別稿においてのべておいたように[註21]内容的には信憑度がひじように高い貴重な文献であるから、しばらく「奥州後三年記」について、同書にみえる金沢柵の立地をみることにする。

武衡が家衡に金沢柵にたてこもるべきことを進言して「金沢の柵という所あり。それはこれ（沼柵のこと）にはまさりたるところなり」と説いているところをみると、家衡の居館沼柵よりは実戦上すぐれている柵であつた。家衡は周知のように清原氏の嫡系武貞の実子である。武貞のあとを正嫡として継承したのは真衡であるが、家衡は真衡の同父異母弟にあたるから、正嫡にはおよばないとしても、同族間においては正嫡につぐ権威者であつたはずである。血脈的にみて、そういうことになる。このような家衡のいる沼柵よりも金沢柵は実戦的にはすぐれているというのである。そして、事実上最後の決戦場となつたのであつた。

金沢柵が沼柵に「まさりたるところ」であつたというのは、いかなることか。沼柵跡の擬定地としてはいま大曲市の藤木四二館と平鹿郡沼館の２説があるが、未調査のため明白ではない。[註22]それで推定の範囲にとどまるが、沼柵という文字からうける印象では平地か、もしくは平地性の丘陵かに立地していた居住性の強い柵であつたのではないか。そうであるとすれば、前述したような権威筋の家衡の居館にふさわしいことでもある。

喜田貞吉によつて提唱された沼柵擬定地藤木四二館は「仙北郡藤木村大字大保（だいぼ）部落の東北、水田の中にある。（中略）此の四二館の如き低湿の平地に在るものを自分は未だ知らぬ」とのべられてあるほど

の低湿地である。[註23] もう一つの擬定地となつている平鹿郡沼館にしても「塹濠の址は水田と化し、大いに原形を損じて[註24]しまうような平地性立地の場所である。

これにくらべれば、金沢柵は勝敗の命運をかけた決戦拠点たるにふさわしい実戦向きの柵であつたことが「まさりたるところ」であつたのである。であるから、義家軍が「ちからをつくして、せめたたかふといへども、城おつべきようなし」であつた。その理由を、「奥州後三年記」はすぐ筆をつづけて「岸たかくして壁のそばだてるがごとし」と記してある。

「遠きものをば矢をもつてこれを射、近きものをば石弓をはずして是をうつ」とものべている。「遠きものをば云々」という表現は、戦闘状況を記述する際の常套的用字法であるといつてしまえば、それもそうであるが、「近きものをば石弓をはづして是をうつ」ためには、緩傾斜の岸では射程距離がのびることになるので不利となる。かなり急峻な岸であれば、それだけ交果的である。義家軍においても「きはなきつはもの」と評されていた伴次郎兼伏助兼が「岸近くせめよせ」勇戦した挿話にも、急峻な岸であつたことをしのぶことができる。

そういつた急涯をもつてめぐらされているのが、この柵であつた。

征軍の持久包囲戦にたえかねて、金沢柵は食糧欠乏に苦しみ「まづ下女小童部など、城戸(きど)をひらきて出来る。軍兵(義家方の)共みな道をあけてこれを通しやる。是を見てよろこびて、(柵内から)又おほくむらがりくだる」こととなつた。ここにいう「くだる」とは、降参して敵にくだるの意味にもとれるし、また柵中の高所から城戸(きど)を出て平地におりてきたという意味にも解釈できるので、いずれとも決定しかねるのであるが、「奥州後三年記」には、明らかに後者の意味に解釈しなければ文意が通じない表現がある。柵はかなり高峻な立地条件を具備していたことの証拠になると思うので、次に掲げる。

金沢柵の攻防戦が膠着化したときのことである。武衡は義家に使をつかわし「たたかひやめられて徒然(つれづれ)かぎりなし」。それで両軍から「撃手」1人づつを出して「めしあはせ、たがひに徒然をなぐさめられ侍(はべ)るべきか」といつてやる。結局、武衡方からは亀次という武者、義家方から舎人鬼武という武者が出あつて「うちあふ」ことになる。このとき「亀次、城の中よりおりくだる」とある。城の中より出できたると記していない。両武者の戦うのを「両方の軍、目もたたかずこれを見る」うちに、亀次が負ける。義家方の兵は亀次が首をとらん」として出てくるし、武衡方の兵は「亀次が首をとられじと」柵から出てきて「両方みだれまじりて大きにたたかふ。」そして「将軍(義家)のつはもの数多(あまた)して、城より下るところのつはものことごとくうちとりぬ。」ということになる。ここにいう「城より下る」とかさきの「亀次、城の中よりおりくだる」とかいうのは、降参の意味ではない。城から出てきて戦闘をしたことである。それが「城より下る」と表現されているということは、この柵の高峻な立地条件を意味しているのである。

まえにみてきたように、急涯をもつてめぐらされている高峻な立地条件、こういつた条件をいまの金沢柵跡にみることができる。

なお柵内の建物としては、「やぐら」と城戸がみえている。

金沢柵が秋田県仙北郡仙北村所在の払田(ほった)柵のように外柵を延々とめぐらしてあるような柵であつたとするならば、義家は「ちからをつくして、せめたたかふといへども、城おつべきやうなし」などという苦戦をしなかつたであろう。

なぜならば義家は２４才のとき、父頼義に従つて、こういつた外柵をもつ柵の攻略方法をすでに経験していたからである。安倍氏最後の拠点厨川柵は「河岸三丈有余、壁立して途なし。そのうちに柵を築きてみずから固(かた)うす」る立地と外柵をもつた柵であつた。　発掘調査の結果、まさにそのような柵であつた（板橋源、「厨川柵擬定地盛岡市権現坂発掘概報」岩手大学学芸学部研究年報第１４巻、昭和３４年。）頼義がこれを容易に攻略することができたのは、つぎのような方法であつた。「村落に入りて屋舎を壊(こぼ)ち運び、これを城湟に塡め、また人ごとに萱草を苅りこれを河岸に積」み火をかけた。「これよりさき、官軍の射るところの矢、柵面の楼頭に立つことなお蓑毛のごとく」であつたので「飛焔風にしたがつて矢の羽につく、楼櫓屋舎一時に火起り」落城する。「陸奥話記」によれば、このような攻撃法のはじまつたのは「九月十七日の未時」（康平５年）とあるので午後２時頃であつて、その日のうちに陥落しているから、まことに迅速有効な攻略軍法であつたといわなければならない。こういつた攻略法ならば、わが国の武人たちの間にはよく知れわたつていたものらしい。フエルナン・ゲレイロが慶長５年（１６００）の関ケ原合戦について、同年の年報にまとめて書いているところによればこうである。「内府（家康）方の城伏見城を奉行たちの軍が攻めるとき、城の周囲の立派な家々を取崩し外濠を埋め最初の外郭をとると、内部の城の周囲に材木を積み火をかけた」（「日本歴史」１００号４１頁。昭和３１年１０月号）。父頼義に教わるまでもなく、義家ほどの歴戦の武将ならば、それぐらいの攻略法は心得ていたはずであろうし、心得ておりながらもなおかつ「ちからをつくして、せめたたかふといへども」陥落せず、ついに長期持久戦となつた金沢柵は、払田柵や厨川柵などとはまつたく異つた急涯高峻な立地条件をもつものであつたとみなければ理解できないことである。

註

1. この丘陵上にいくつかの平坦面があり、それぞれ本丸、二の丸、北の丸、西の丸というような名称で呼ばれている。こういつた名称は前九年の役や後三年の役の頃にはまだ城柵にはなかつたのであるから、いずれは後世になつてから世人が便宜的に付与した名称であろうが、現在二の丸と称されている頂上平坦面に八幡神社がある。国道１３号線から八幡神社にいたる参道入口の鳥居のすぐ南に８０.２５メートルの水準点がある。これを基準として本丸にある伊藤耕餘翁碑台石まで高度を計測した結果１７１.９２メートルあつたから、本丸の比高は約９１メートルということになる。

2. 「秋田叢書」第１０巻３１０～３１２頁。

「○ 清原朝臣武衡家衡古城蹟方角及間数

○ 本麻呂　八幡宮の本社より辰己ノ方に中ル。其旧迹東西四拾間余り、南北三拾間余地。

○ 二ノ麻呂　東西八拾間余、南北四拾間余地。

○ 北ノ麻呂　拾五間四方余

○ 西ノ麻呂　安本館といふ、東西三拾間斗、南北百間斗。

○ 金濯水（かねあらひ）　妙美井（ましみず）也、本丸の東の沢中也、金洗ひ沢といふ。いにしへは朝夕城中にての要水なりしといへり。むかしそこにて砂金を洒ひし地にて、金濯沢てふ事の省（はぶかり）て金沢といふ名こそ負つれ。一間四方の岩清水也

○ 追手口　栗谷川の橋より御本社までの間ダ六町余り、道広一丈斗り也。

○ 搦手口　御本社より寅卯の間にあたれり。

○ 古城巡りは五拾町斗也。

○ 権五郎景正高名塚　坤ノ坊（ママ）に在り、往復ノ道の傍也。大杉一樹あり、宝暦の頃までは松も生ひたりしと記録に見えたり。

○ 厨　川　戌刻の方神阪の下タ、往還の街中に橋あり、景正が故事は人みな知れり。此川の鰛（かじか）は眇（すがめ）也といふ、片目鰍といふ（下略）

○ 陣　館　古名前城といふ、往復の衢の傍に在り、旧蹟東西三拾間余り、南北七拾間余りせ也。義家陣営の跡也といへり。」と詳記されている。因に、片目鰍については未広恭雄氏の「魚と伝説」（昭和４０年刊、新潮社）を参照されたい。

3. 昭和４年８月の刊本下巻９ノ４６頁。

4. 講談社本、志１２ノ２８３頁。

5. 出羽国部１７丁ウ。

6. たとへば吉田東伍の大著「大日本地名辞書」（４５６４頁）、岡部精一の「前九年役と後三年役」（「奥羽沿革史論」所収２２６～８頁。大正５年）、藤原相之助の「日本先住民族史」（３４９頁。

大正５年）、大森金五郎の「武家時代の研究」（第一巻２８６頁。大正１２年）など。

7. 本丸跡にある「南山戎谷君寿蔵碑」によれば、名は亀吉、南山は号である。慶応2年１０月１８日南秋田郡土崎湊に生れた。本姓高橋氏、戎谷家を継ぐ。明治１９年から金沢町に住み「人となり恬淡寡欲（中略）、人ありて請えば則ち楽しんで社（板橋言、八幡神社のこと）の来歴および後三年役の古蹟を説き、今古稀をすぎてもいまだかつて倦まざるなり」（原漢文）とある。

昭和１３年５月の建碑。

南山の「金沢考古一斑」筆書本一巻は八幡神社に所蔵されてある。これには「大正庚申（９年）夏日於古金城頭草堂、耕餘藤純識」という識語がある。

8. 本丸跡にある昭和５年５月２６日の建碑によれば翁は金沢の人で、「創設金沢公園、改修八幡社殿、発揚後三遺蹟、以所著史巻碑補国史之闕漏、迎貴人高士、躬為東道、交士広四方多知己」とある。ここにいう。「所著史巻」といつてるのは翁の「後三年戦蹟志」、「金沢史叢」などのことである。前書は大正６年８月２日の初版で、このときの書名は「後三年戦蹟誌」となつているが、その後、版を重ね、昭和５年６月の第四版では書名は「改訂後三年戦蹟志」となつている。

後者の「金沢史叢」はまだ公刊されていない。稿本二部のうち一部は金沢八幡神社に、他の一部は横手市立図書館に保管されてある。図書館所蔵本には「玆歳 昭和己己（４年である）、予偶古稀及巻成」という自序がある。八幡神社所蔵本は二帙になつていて第一帙は七巻、第二帙は十巻、計十七巻でいずれも戎谷南山が大正５年から同１２年にわたつて筆写したものである。

9. 河出書房「日本歴史大辞典」第四巻３１９頁。金沢柵項、板橋源執筆、昭和３１年。

10. 白雉の略地図と信躬の見取図はすでに深沢多市の報告書に収められ発表されてあるので本稿においては省略することにした。

さて、白雉とはいかなる人物であるのか、いまのところ未詳であるが、伊藤直純翁の「金沢史叢」１３所収の「金沢古城図之間数調」という項に「金沢古城図は寛政三年亥歳二月四日、信躬先生石川、妹尾、山崎三氏と与に実地を踏査して描く所のものなり、図面は竪四尺二寸、横三尺二寸の紙に彩色を施したるものなり。（中略）此図は八幡神社一の鳥居を起点とし、磁石を用て実測したるものの如し」と解説してある。翁はさらに筆をすすめて

「但、信躬は何れの人にして如何なる人なるにや、余未だ之を知らざるを遺憾とす、唯石川、妹尾、山崎等の人々横手在住の旧藩士に（て脱カ）其後裔猶存するを知る、察するに信躬も亦横手の士なるべき乎、耕餘識」

と特記している。しかし、三浦匝三氏の「古今秋田英名録」（昭和１３年１月１０日発行、秋田市茶町扇ノ丁）には、

「信躬〔軍学〕佐藤氏、湯沢の人、幼名信浮、要人と称し後、存兵衛と改む。

軍学を梅津忠致に学び城取法皆伝免許を受く。佐竹義明、義敦、義和の三公に仕へ阿仁銅山方たり

寛延元年４月１６日生、寛政１３年２月１３日歿す。

年５４」（上巻１２６頁）とみえている。

11. 赤川菊村編輯「萩沢歳時記」。昭和１７年刊行。非売品。

12. 後３年史蹟顕彰会所蔵、横手市金沢支所保管。１６００分の１の地図にその出土地点を明示してある。

13. 未刊であるが横手市金沢支所に寄託保管。

14. 徳丹城跡において柵列線に沿つた櫓は今までところ七基発見されておるが、柵列をはさんで内側に三本、外側にも三本の太い掘立式柱脚をもつものだけである。

四隅だけに一本づつ計四本の太い掘立式柱脚をもつた金沢柵跡本丸のこの遺構とは異つている。

詳細については「徳丹城跡発掘略報〜岩手県紫波郡矢巾村徳田所在」の昭和４０年度の分と昭和４１年度分を参照されたい。

15. 卒時の間に管見に入つたものを列記すれば、いずれも中世以降のものであるが「築城記」（作者、成立年代ともに未詳、しかし「右此一巻者、朝倉殿家中窪田三郎兵衛尉、無隠依為射手、従朝倉殿、窪方被相伝之（中略）、手時永祿八（１５６５）１０月２７、河村入道誓真（花押）」とあるので室町中期ないし末期のもの。新校群書類従、武家部第１８巻所収）。「藤葉栄衰記」（作者、成立年代ともに未詳であるが、室町末期から戦国期の関東、奥羽地方の藤原氏末葉の諸豪族の栄衰を記してある。続群書類従の合戦部、改定史籍集覧第１４所収）。「永享記」（作者、成立年代ともに未詳であるが、永享８年、１４３６年から約半世紀にわたる関東地方の争乱を記している。改定史籍集覧第１２、群書類従第２０巻上合戦部所収）。「能島家伝」の物見櫓楼の事条（作者、成立年代ともに未詳であるば、海事史料叢書第１２巻所収）。「長沢九郎兵衛聞書」（奥書に「右大阪陣之儀、又者世聞之取沙汰長沢九郎兵衛、後藤又兵衛に属し致見聞処之物語……元祿１５　壬午歳１月日写之畢」とあるので、おおよその成立年代を推知できる。改定史籍集覧第１６冊所収）。「十時三弥介書上之写」（作者、成立年代ともに未詳であるが、島原の乱について記したもの。改定史籍集覧第１６冊所収）。「東遷基業」の三方ケ原合戦の事条（享保１７年、１７３２年に水戸藩士佐久間健（高常）の著作）。東大史料編纂所、上野図書館所蔵の写本。古事類苑兵部６７３頁所収）。「武教全書」（山鹿素行の著。岩波書店の山鹿素行全集所収）。その他。

16. 諸橋轍次編「大漢和辞典」第一巻５２０頁。

17. (1) 内青鳥城跡（埼玉県比企郡唐子村大字石橋）

(2) 三ツ木城跡（同県北足立郡桶川町大字川田谷）

(3) 久喜館跡（同県南埼玉郡久喜町大字北方字馬場）

(4) 天神山城跡（同県秩父郡野上町岩田）

(5) 伊奈熊蔵陣屋跡（同県北足立郡伊奈村大字小室字丸山丸の内）

(6) 奥沢館跡（東京都世田谷区玉川奥沢町三丁目）

(7) 榎下城跡（横浜市港北区三保町）

(8) 小机城跡（同市同区小机町）

(9) 茅ケ墨館跡（同市同区茅ケ崎町城山）

（以上「中世城郭の研究」による。）

18. 板橋源、佐々木博康、奥州平泉高館、岩手大学教育学部年報第２６巻、昭和４１年１２月、平泉遺跡調査会、中尊寺第二期第二次発掘略報告、昭和４０年４月

19. 紫波町教育委員会、岩手県紫波町善知鳥館調査報告書、昭和３９年１２月

20. 「奥州後三年記」についての解題はすでに諸先学によつてなされているので、ここには省略し、論文名だけを列記する。

(イ) 和田英松「前九年後三年合戦絵巻考」、歴史地理１８ノ６。同氏の「国史国文の研究」にも所収。

(ロ) 三浦周行「後三年役に関する新研究」、史学雑誌２２ノ１。

(ハ) 花見朔巳「解題」、新校群書類従第１６巻所載。

(ニ) 板橋源「奥州後三年記考」、奥羽史談４ノ１、昭和２８年。

21 板橋源「文献史料にみえる金沢柵の立地条件と義家、家衡」、出羽路第３１号、昭和４１年１０月。

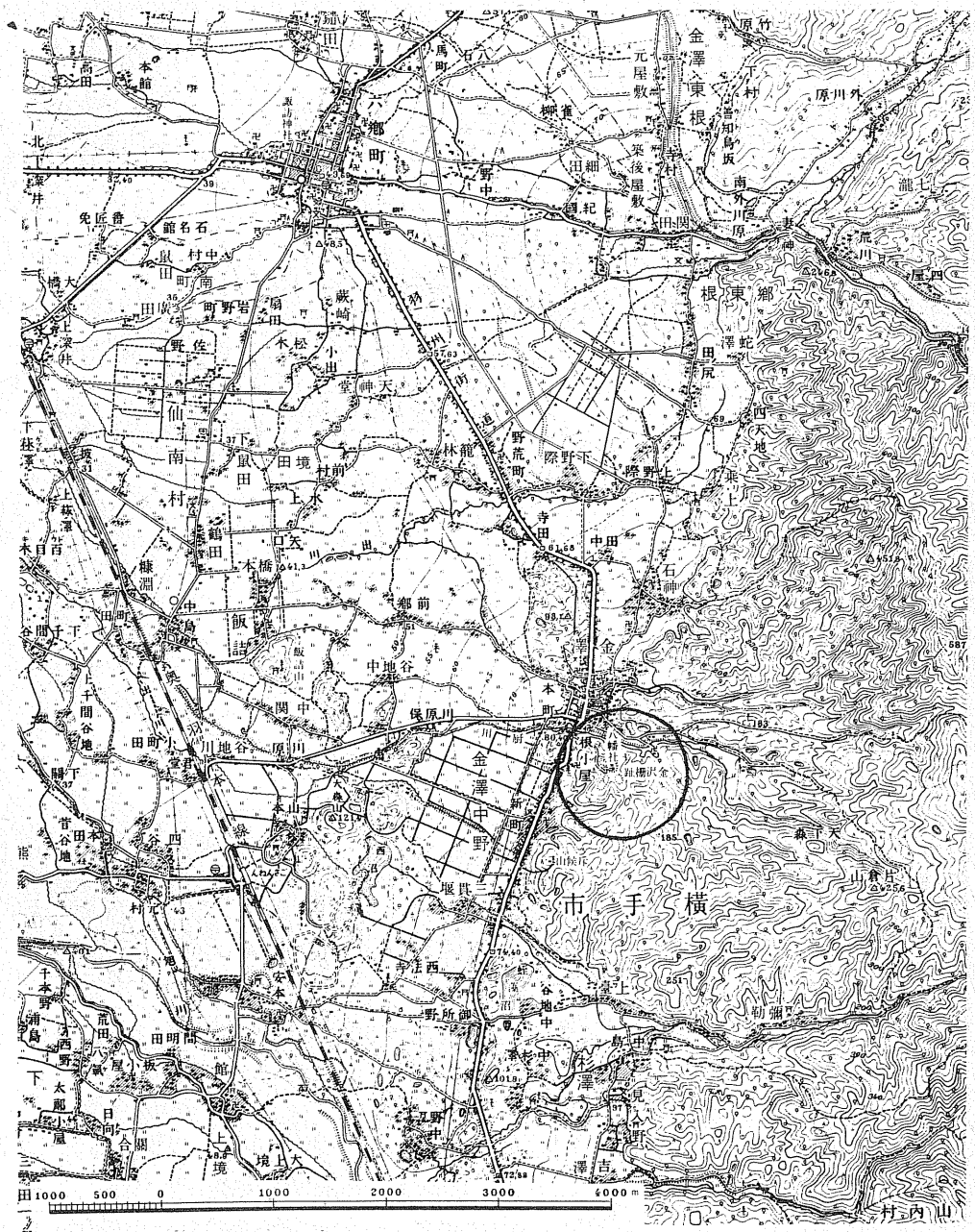
近刊の「秋田県史」も沼柵の擬定地として「平鹿郡沼館とも又同郡藤木村とも云う」（第１巻３２３頁）と二説をあげている。

22. 喜田貞吉「仙北藤木四十二館」、秋田史壇第一輯、昭和８年。

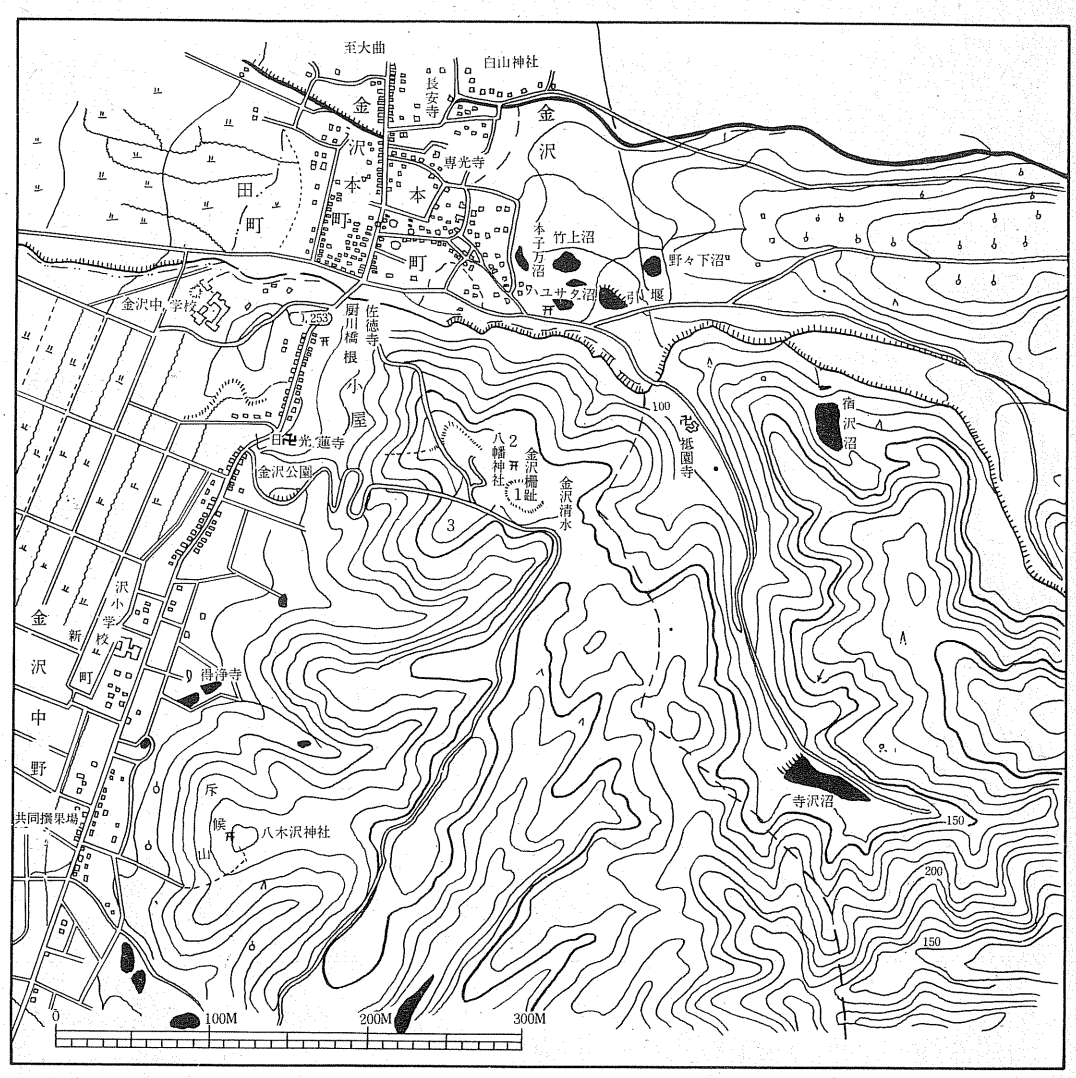
23. 同　　前

24. 同　　前

以　　上

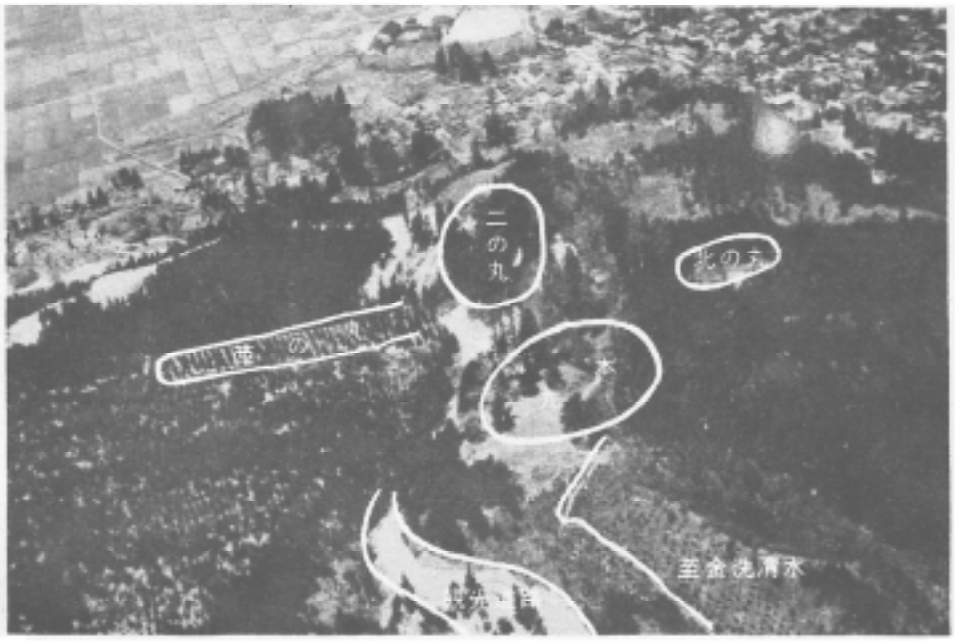


第1図　金沢柵跡近傍地形図（５万分の１）
黒円圏は金沢柵の位置。「六郷」図幅による。

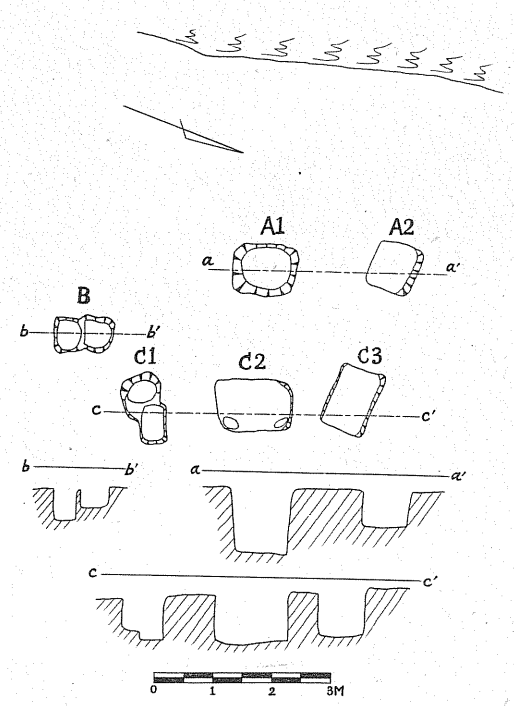


第２図　金沢柵跡近傍地形図（34分の１）

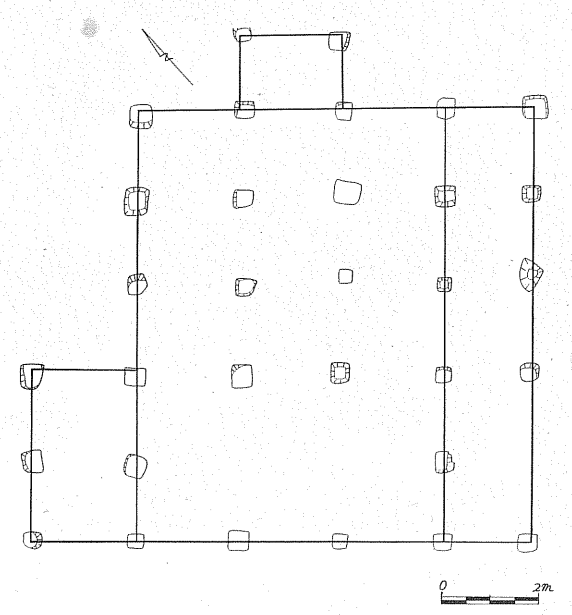
第3図　金沢柵跡航空写真A
金沢中野字長持上空より東北方に金沢柵を望んだもので、中央の沢が岩瀬沢（敵が沢）。左方の10本ほどの長い杉林が八幡神社のある通称二の丸と称されている場所で、その右の台地が通称本丸、左方の黒い杉林の上方が西の丸といわれている場所である。
〔福田久四郎氏の教示による〕



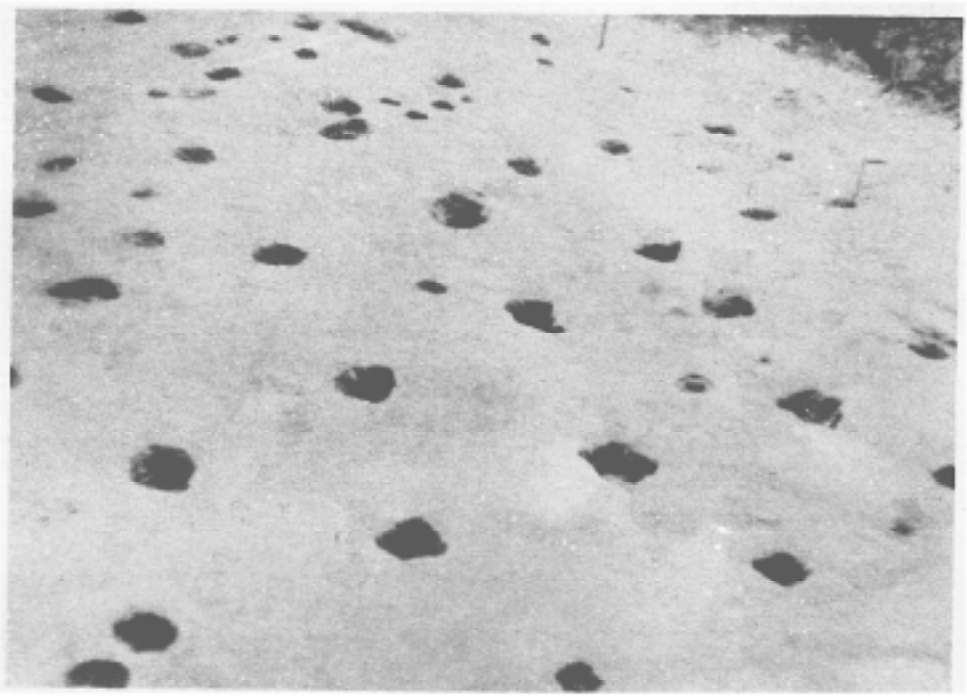
第4図　金沢柵跡航空写真B
金沢柵上空から西方に望んだもので、中央は観光道路。左の植林した所は西の丸。その右は二の丸。二の丸の手前が本丸。本丸から細い道をくだれば金洗清水にいたる。本丸の右上の白い所が北の丸。
〔福田久四郎氏の教示による〕



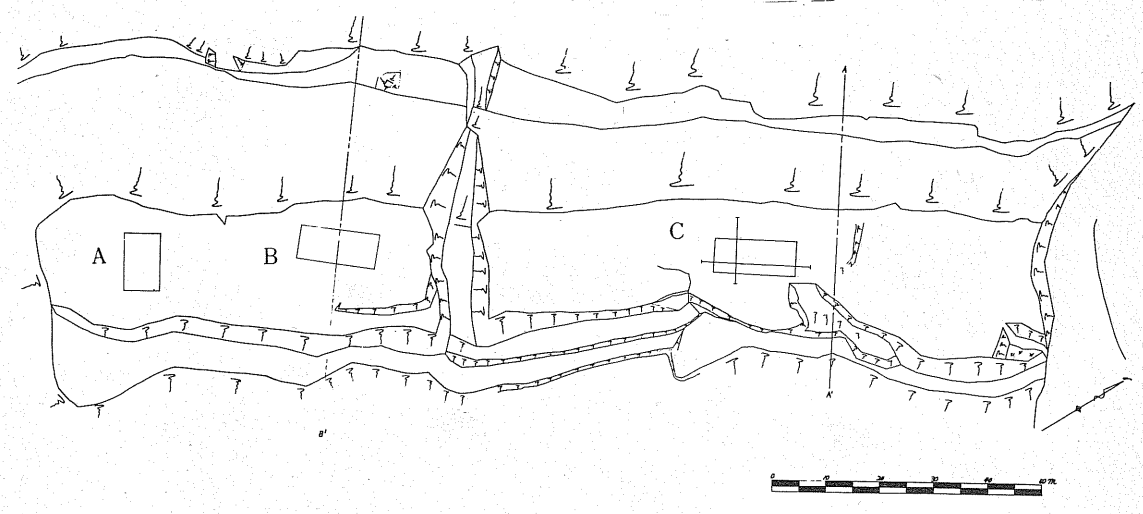
第5図　本丸西南隅地区実測図（鍋倉勝夫担当）



第6図　北の丸地区実測図（富樫泰時担当）

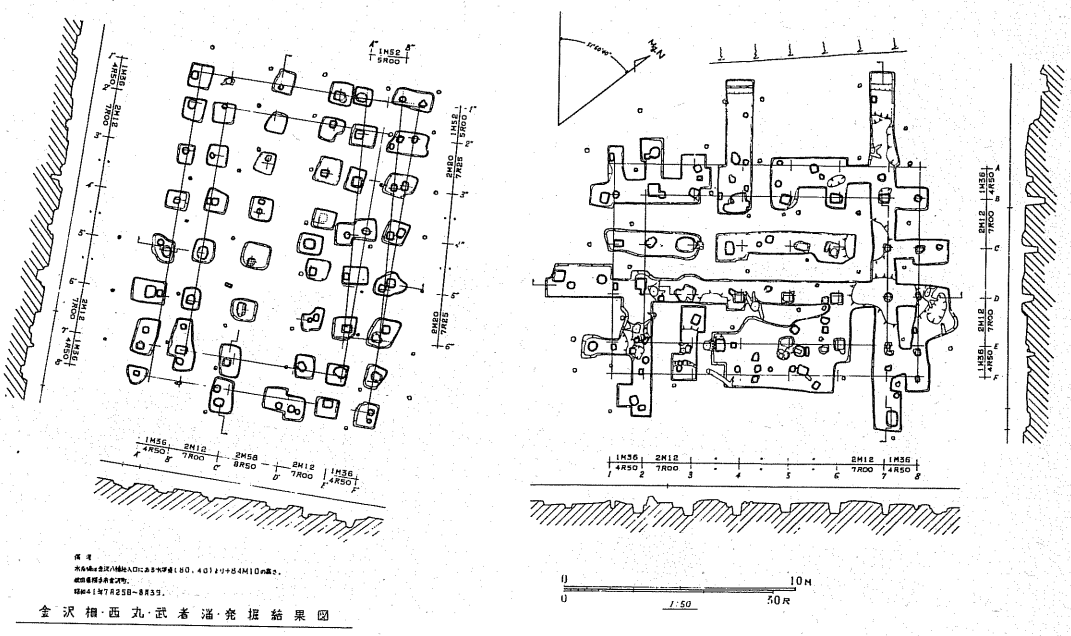


第7図　北の丸地区発掘写真（富樫泰時担当）
南方より写したもの



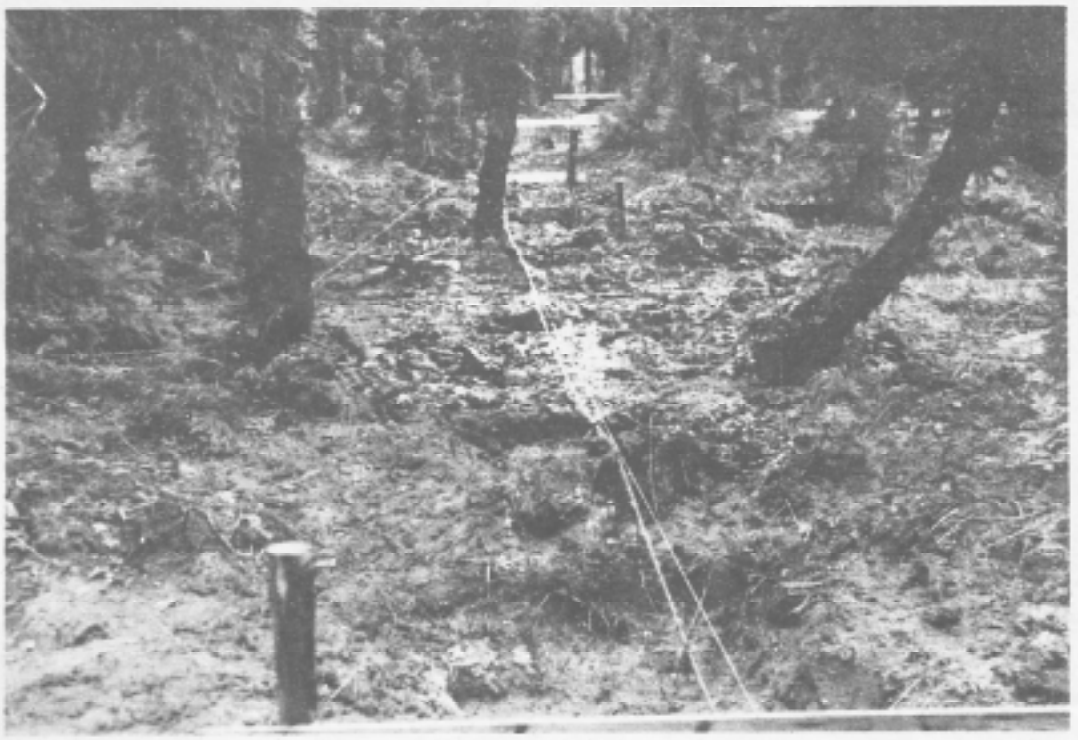
第8図　西の丸地区実測図（富樫泰時・藤村貢担当）
A、B、Cはそれぞれの建物の母屋位置を示す。

第9図　西の丸地区現状写真（佐々木博康・木村幸治担当）。
北方より写す。中央の一段と低くなっている個所が塹で、その右手は武者溜、左手は安本館である。

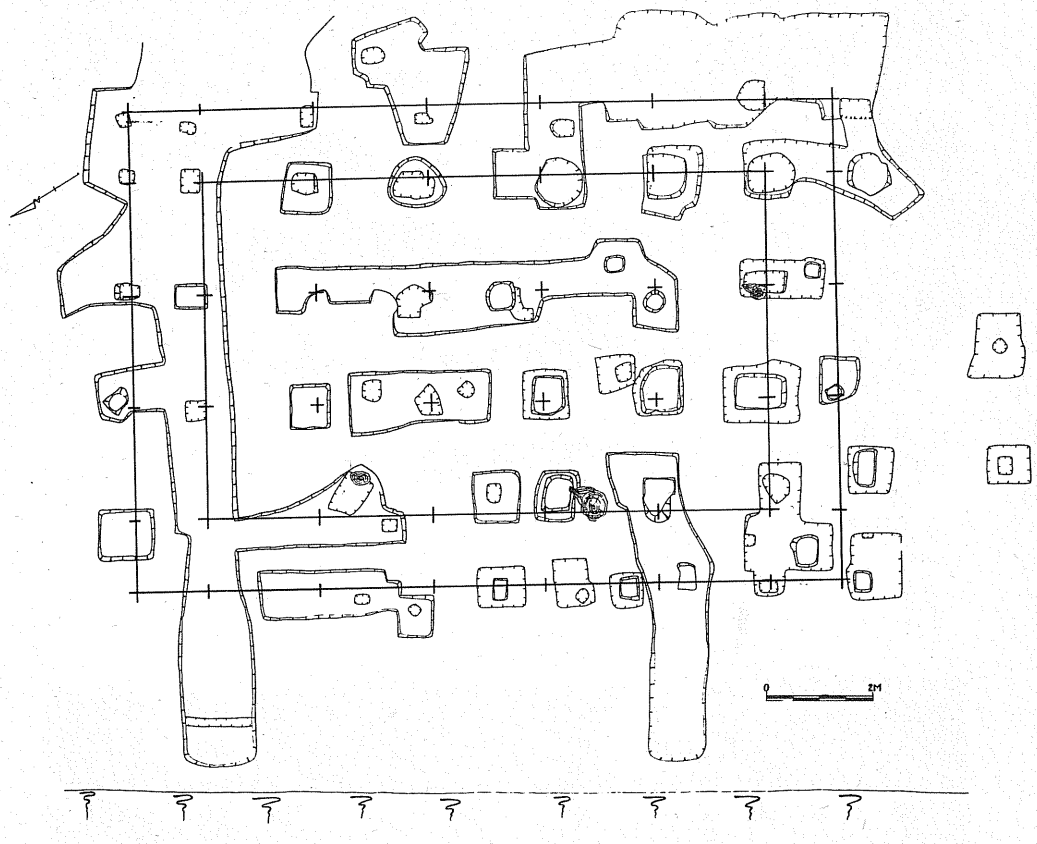


第10図　西の丸Ａ・Ｂ地区実測図（佐々木博康・木村幸治担当）

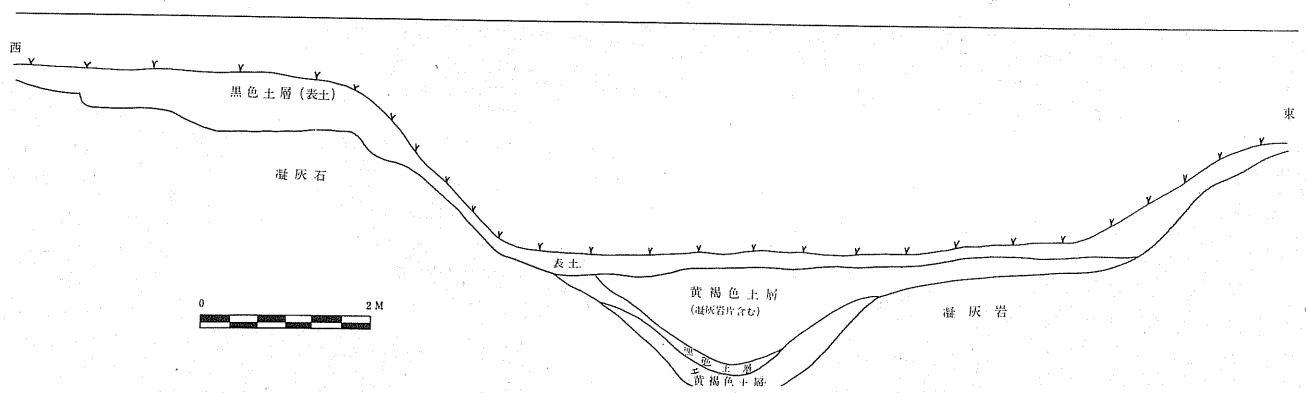
第11図　西の丸A地区発掘写真（佐々木博康・木村幸治担当）
東北方より写す。中央の手前の実測用のヤリカタから遠景のヤリカタまでひいてある水糸は実測図でいえばD線にあたる。手前の杭のみえる柱穴がD７。遠景の杉の木の間にB地区の実測用のヤリカタがかすかにみえている。



第12図　西の丸B地区発掘写真（佐々木博康・木村幸治担当）
西南方より写す。手前のヤリカタから遠景のヤリカタまでひいてある水糸が実測図の５線で、これと直交する水糸がC線である。遠景の杉の木の間にA地区のヤリカタと水糸がかすかにみえている。



第13図　西の丸C地区実測図（富樫泰時担当）



第14図　西の丸塹跡実測図（永瀬福男担当）

あ　と　が　き

この報告書は、序にも記したとおり中間的なものであるが、年度末のご多忙のとき、板橋先生、奈良先生、佐々木先生がおまとめになつたものであり、編集子としては、写真、図版をもつと豊富に入れて刊行したかつたが、いろいろな事情でこのようになりました。

横手市の関係者の熱意により第三次まで発掘調査が行なわれたが、今後さらにこの遺跡が究明され、近い将来報告書が集大成されることを期待するものであります。

昭和４２年３月

社会教育課

加賀谷　辰　雄

吉　川　欣　一